

「重症心身障害の方のコミュニケーション支援の考察と今後の取り組み（Ⅲ）」

以前、同タイトル(I)で、タブレット PC のコミュニケーションツールとしての手軽さと多様性の利点について紹介した。そして、コミュニケーションに障害のある方たちがタブレット PC をツールとして活用する際には、受け手側のコミュニケーション能力も試されることを指摘した。

同タイトル(II)で述べられているように、日中活動事業所「アドヴァンス」では、すでにタブレット PC が実際に導入され、まさにそれが試されているのである。タブレット PC は、その手軽さと多様性から、その操作ができる者にとっては、PC 上で何でも情報は手に入り、人とのやりとりとも可能となる。しかし、PC という「もの」とそれを操作する「人」との関係に終始し、現実世界のように人間同士のつながりを必ずしも必要としない関係に終わってしまうように見える。もちろん、場面や場合によっては、それで良いこともあるだろう。しかし、コミュニケーションツールとして考えると、「もの」に介される「人」との関係が成立しているだけでよいのだろうか。

埼玉大学の細渕富夫教授の指摘によれば「人は全て、人との関係の中に生まれ、育ち、人との関係を通して、〈ひと〉〈もの〉〈こと〉を共有の意味として形成していく」という。「世の中の言葉のほとんどは、辞書を引けば大体意味は分かるだろう。でも、嬉しい事を共感したり、人と思いがったり、心配して冷や汗をかいたり…、そういった言葉にはできない感情を人との間で共有していくことで、本当の意味として理解されていくのではないか」というこの指摘は上述したような感情や共有は「人⇄もの」の関係だけでは成立が難しいことを。人との関係の中で、タブレット PC のような「もの」を利用するからこそ、人と人との関わりが広がっていく、人との間に意味や感情を共有する機会が増えていくのではないだろうか。特に重症心身障害のある方は、一度に多くの人に、自分の思いを 1 回でくみ取ってもらえない困難さを抱えている。また複雑な思いを抱えていても、ほんの一部しか伝えられない歯痒さも感じているかもしれない。そこを、手軽さと多様性をもつタブレット PC を介すことで、様々な人とのやりとりがスムーズになっていく可能性を秘めているのである。

前回は述べたが、「魔法のランププロジェクト」（東京大学先端科学技術研究センター）では、障害のある子どもたちが、どこにでも持ち出せ、外出先で色々な人々と関わり、わくわくする活動のきっかけになり、もっと生活が豊かになるための魔法のようなツールになるとして、タブレット PC を多くの障害のある子どもたちに紹介している。そして、その後の使用成果についても報告しあい、日々情報交換をし、試行錯誤を繰り返して研究を重ねている。タブレット PC は、ただそこに存在するだけでも、1 回使用しただけでも、魔法のランプにはならないのだ。目の前にいる利用者様とのやりとりの中で、支援者として感じた些細な変化や関わり方について、皆で話し合うことが、ランプの精を呼び出す魔法の呪文になっていくのだ。前述のアドヴァンスでも、様々な試行錯誤が繰り返されていることは、同タイトル(II)で報告されているとおりである。タブレット PC を誰にとっても魔法のようなコミュニケーションツールとしていくことができるかどうかは、受け手である我々支援者の側のコミュニケーション能力に依存する部分が大きいことを忘れてはならない。それを、常に自分の心の中に留め、使い手側から出される貴重なサインを見逃さず、また受け手側も話し合い、共有し、論議しながら、使い手側へ返していく…。それを日々重ねていけば、タブレット PC が魔法のランプになる日はすぐそこにある。